賀茂真淵『万葉考』新巻序の意識-自筆稿本調査に向けて-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学日本文学研究会 公開日: 2016-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 直美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17833

【研究ノート】

賀茂真淵『万葉考』新巻序の意識—自筆稿本調査に向けて—

山口　直美

1　はじめに

賀茂真淵（1697-1769）は、古代から平安にかけての古典籍の注釈だけでなく、和歌の創作も行うなど多くの著作を残した国学者である。中でも万葉集に高い関心を持ち研究を重ねたことが知られており、その代表とされる著作が万葉集の全注釈書である『万葉考』二十巻である。特徴のひとつとして、万葉集の成立に関する視点から現行の万葉集の巻一から巻六を、『万葉考』では巻一・巻二・巻十三・巻十一・巻十二・巻十四と改めたことが挙げられる。しかし万葉集の巻序を改めるという新しさは言及されるが、その経緯は十分に検討されているとは言い難い。巻序に対する意識の変遷を探ることは、真淵の万葉集に対する研究の根幹に深く関わる問題である。よって、それを明らかにしたいと考える。その方法として、自筆稿本と版本の詳細な比較検討が有効である。『万葉考』を始めとした自筆稿本では、推敲のあとをみることができる。版本だけではなく、自筆稿本から注釈の推移などを読み取ることで、巻序を改めるに至る経緯が明らかになると考える。本稿はその前段階として現時点での資料整理及びいくつかの問題点の整理を行い、今後の調査に向けての足がかりとするものである。

2　『万葉考』の巻序意識

『万葉考』は、総論にあたる「万葉集大考」にはじまり、巻ごとの注釈、更に巻六までは別記が添えられている。（巻七以降の別記は、巻十四以外、現在所在不明である。）真淵が直接書き表したものは巻一から巻六までである。真淵の死後、巻七以降は狛諸成が中心となり、真淵の草稿をもとに複数の門下の弟子たちにより筆が加えられ刊行に至る。これについては巻七序に狛諸成が詳細を述べている。

真淵が『万葉考』に取りかかり始めた時期は、宝暦九（1759）年ごろかと言われる。『万葉考』の「万葉集大考」の末尾に記されていることからも宝暦十(1760)年に巻一・二と同別記は脱稿したと思われる。巻一・二と同別記は脱稿以後も加筆をし、上記三巻は明和五(1768)年に刊行された。翌年の明和六年に真淵は亡くなるが、『万葉考』巻六までは生前に原稿の整理を終えている。巻三から巻六までと同別記は没後の刊行である。巻七以下は写本で伝えられており、二〇巻全部が活字になったのは明治以後の全集による。『万葉考』巻七以降は狛諸成らが筆を加えているため、純粋に真淵の著書とは言えない〈1〉。

真淵の万葉研究における大きな特徴は、先に述べた通り万葉集の成立・編纂に関する見解にある。通行本の巻一・巻二・巻十三・巻十一・巻十二・巻十四を本来の古撰万葉集と捉え、その他の巻は万葉集ではないとした。これは「万葉集大考」（くさ／＼の考「集の名」）に述べられている。

しか有て此集今は二十巻あれど、実には一・二の巻と今の十三・十一・十二・十四の巻ぞ、本の三・四・五・六の巻にて此六つ巻

を万葉集とは名つけられし物とす〔「万葉集大考」『賀茂真淵全集』第一巻　続群書類従完成会　十四頁〕

さらに続いて、他の巻と再編成し「万葉集大考」には「巻のついで」と項目を立てて以下のように記す。

巻々の体古き新き有、それのみならず、年月の次もいと乱れて見ゆ、故に深く考へて、今あらため正すこと左の如し、一・二〔今に同〕三〔今の十三〕四・五〔今の十一・十二〕六〔今の十四〕、是までを万葉とす、七〔今の十〕八〔今の七〕九〔今の五〕十〔今の九〕十一〔今の十五〕十二〔今の八〕十三〔今の四〕十四〔今の三〕十五〔今の六〕十六〔今に同〕十七〔同〕十八〔同〕十九〔同〕二〇〔同〕、右の七より下は家々の歌集にて、万葉にあらず、此事委しくは別記に見ゆ、〔「万葉集大考」『賀茂真淵全集』第一巻　群書類従刊行会　十五頁〕

右に見るように、先にあげた六巻を古撰万葉とし、他は家々の歌集であると述べている。つまり、『万葉考』巻一から巻六までは新巻序による注釈である。真淵が万葉集中でもっとも古い原形として特に力を注いだ部分と言える。

自筆稿本としては、天理大学図書館所蔵保坂潤治旧蔵の『万葉考』（巻一・二）がある〈2〉。こちらは草稿本にあたるとされ、墨で消す、白墨で塗抹した上から書き改め、貼り紙による書き加え等が見られ、真淵の自筆と考えられる。この自筆稿本について、千田氏の調査では、注釈を加える際の巻の表記について次のように報告されている。

稿本では、語句の註釈に当つて、他の巻の語句を引用する際には、流布本の巻名で挙げているのを、版本では全部、真淵の新規並べた巻名で挙げていて、彼の新見解を徹底的に披瀝しているのである。一例だけ示すと、

（2）海原波（ウナハラハ）、さて大きなる水をば海といふは、巻三に猟路池に（人麿）、皇神者神爾之坐者真木之荒山中尓海成可聞（稿本）大水を海ともいへる例有が中に巻十四、猟路池にて人万呂、すめろぎは神にしませば真木の立、あら山中に海成可聞（ウミヤナスカモ）とよめる是也〈3〉

右の例は万葉集二番歌、舒明天皇作とされる歌への注釈である。真淵は、訓や語句の説明の際には、『万葉集』にとどまらず、『記・紀』や『延喜式』などを用いて注釈を加えている。引用に際し、巻が稿本と版本とで修正していないところは一カ所のみであるとも指摘している。このような統一性の高さから、巻の表記には一段と注意を払っていたことが伺える。草稿では巻表記を通行本で記しているため、この時点では巻序を改めることは定まっていなかった可能性がある。ただ長年に渡り万葉集の研究を重ねてきた真淵にとって、突如として巻序を改めると思い至ったとは考え難い。そこで『万葉考』以前の著作を遡り、整理する必要がある。

3 『万葉考』と『万葉解』

真淵の万葉集に関する著作を、時系列で並べると次のようになる〈4〉。

寛保二年（1742）（四六歳）万葉集遠江歌考
延享四年（1747）（五一歳）冠辞解
寛延二年（1749）（五三歳）万葉解〈5〉
宝暦二年（1752）（五六歳）万葉新採百首解
宝暦七年（1757）（六一歳）冠辞考
宝暦十年（1760）（六四歳）万葉考（巻一・二・同別記）
明和三年（1766）（七十歳）万葉集竹取翁歌解
明和五年（1768）（七二歳）万葉考（巻三・四・五・六・同別記）

とくに『万葉考』と繋がりがみえるものが、寛永二年成立の『万葉解』である。『万葉解』は「万葉解序」「万葉解通釈并釈例」「万葉解上」をまとめた総称をいう〈6〉。

成立事情は「万葉解通釈并釈例」に真淵が記しているが、上野寛永寺の妙法宮の依頼をうけて書き著したものである。起筆は寛延元年（1748）で宮に献上したのは寛延二年三月である。

「万葉解序」「万葉解通釈并釈例」の写本は、東洋文庫（岩崎文庫）、国立国会図書館、聖心女子大学、無窮会（神宮文庫）があり、東洋文庫本は自筆稿本であるとされる。「万葉解上」については自筆のものが国立国会図書館に一本あるのみである。

「万葉解序」は、全体の序文に相当し、藤原定家ら万葉集研究について述べている「万葉解通釈并釈例」は万葉集の概略にはじまり、名義、作者、時代、部類、巻序、諸本、今本の錯乱、音韻、冠辞、長歌などが詳しく述べられている。「万葉解上」では巻一の一番歌から二七番歌までの注釈が加えられている。

「万葉解通釈并釈例」を見ると明らかであるが、既に巻ごとの撰者や家集である巻の想定、時代区分等に強い関心があることがみえる。巻序についても、通行本の巻十六を巻五と類すると記しており、他にも巻序に対する言及が認められる。それ以外でも「万葉集大考」と共通する点が見受けられ、前身となる部分が既に成立していたと考えてよいだろう。次に「万葉解上」で述べられている、具体的な注釈例として、同じ二番歌を参照したい。

海原波云云、これは此山下に大池あるに群鷗の立居する景をよませ給へり、古へは潮海ならても大水をは海ともいへり、第三巻長皇子遊猟路池之時人まろ歌に皇者神尓之坐者真木之立荒山中尓海成可聞、（略）（「万葉解上」『万葉解』賀茂真淵全集　第六巻　三四頁）

右にみえるように、語の解釈、引用の歌ともに『万葉考』に引き継がれている。また、巻の表記についても通行本を採用していることが確認できるだろう。「万葉解上」の異なる点は、右に引用した部分につづき営膳令など更に多くの例を挙げて注釈を加えているところであ

る。『万葉集』の自筆稿本を確認することはできないが、推敲を続けることで形式が整っていったとも考えられるだろう。「万葉解上」ではこの項目だけではなく、『万葉考』と通じる注釈を複数みることができる。このような点から『万葉考』の草稿としての側面を持つことが指摘されており、注釈内容の変化を調査する必要があるだろう〈7〉。

4　まとめにかえて

資料と先行研究を確認することでいくつかの手順を明確にすることができた。『万葉考』においては、草稿は通行本の巻を使用し、清書に際して新巻序としていた仮説が立てられる。その立証には当然ながら『万葉考』自筆稿本と版本のつきあわせが必要となる。また、『万葉解』の自筆稿本と版本の比較の後、『万葉解』と『万葉考』の注釈内容の検討も求められるだろう。最後に本居宣長との質疑応答で知られる『万葉集問目』についても参照すべき資料であることを書き添えておく。

〈註〉＊旧字及び異体字は適宜改めた。

〈1〉『万葉考』の稿本・版本、出版事情については、弥富破摩雄『近世文学之研究』、久松潜一『万葉研究史』等を参考にした。

〈2〉『万葉考』の自筆稿本について、千田憲氏は（「著者自筆の「万葉考」稿本に就いて」『ビブリア』15号　1959年10月）において東京大学図書館蔵本の存在を記すも、『万葉考』解説によれば焼失資料としている。また、古書即売会に、万葉考の自筆本が出品されたとあるがその本の所在は不明であり、これらの確認が急がれる。

〈3〉千田氏（前掲論文）、傍線は本稿筆者による挿入

〈4〉表は大田善磨「解題・略年表」『神道大系論説篇復古神道二』、井上豊『賀茂真淵の業績と門流』、三枝康高「賀茂真淵略年表」『賀茂真淵伝』を参考にした。なお、成立時としており刊行時ではない。

〈5〉なお、無窮会本識語には「延享四年正九日真淵師に得て写之」とある。『賀茂真淵全集』第六巻　『万葉解』解説七六頁参照。

〈6〉写本では、「万葉解序」「万葉解通釈并釈例」と「万葉解上」が別に存在し三部がそろったものがないとのことだが井上豊氏にならい三部をまとめる。他成立事情など詳細は井上豊『賀茂真淵の業績と門流』を参照のこと。

〈7〉「万葉考」の総説部にあたるところが本書にみえるなど、草稿としての機能を小山正（『賀茂真淵伝』）らが言及している。

〈参考文献〉

『賀茂真淵全集』第一巻～第六巻　続群書類従完成会1977年～1980年
『神道大系論説篇二十四　復古神道（二）賀茂真淵』神道大系編纂会1988年
弥富破摩雄『近世文学之研究』素人社書屋　1933年
久松潜一『万葉研究史』要書房　1948年
小山　正『賀茂真淵伝』世界聖典刊行協会　1960年
三枝康高『賀茂真淵』吉川弘文館　1962年
井上　豊『賀茂真淵の業績と門流』風間書房　1966年

河野頼人『万葉学研究・近世』桜楓社　1969年
原雅子『賀茂真淵攷』和泉書院　2011年
中村幸彦「万葉考」自筆の一稿本」『萬葉』20号　1956年7月
千田　憲「著者自筆の「万葉考」稿本に就いて」『ビブリア』15号　1959年10月
扇畑忠雄「万葉集の時代区分」『萬葉』第34号　1960年1月
河野頼人「万葉集の歌の排列と「万葉考」—注釈の基盤にあるもの—」『北九州大学文学部紀要』第30号　1982年12月
大久間喜一郎「契沖と賀茂真淵の万葉集研究」『国文学解釈と鑑賞』第51巻2号　1986年2月
田中文雅「楫取魚彦の万葉集研究—もう一つの万葉考—」『就実語文』第21号　2000年12月